

博物館運営における行政の支援と住民の役割：
ブレス・ブルギニョン・エコミュゼの場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 宏之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8691

《報告》

博物館運営における行政の支援と住民の役割

— プレス・ブルギニョン・エコミュゼの場合 —

石川 宏 之*

1. はじめに

博物館⁽¹⁾は、社会によって創られ、地域と関係を持つ組織である。そして地域の問題に対処し、地域を生かし、更に地域に影響を与えていく。博物館がそれに応えるためには、博物館をめぐる地域社会の視点から博物館活動を捉えた調査・研究が求められる⁽²⁾。

今日、博物館活動で最も変化している点は、教育活動である。フランスのエコミュゼ⁽³⁾は、地域の住民が積極的に参加し、創造し、記憶とふれあう場として注目されている。そしてエコミュゼは、地域を開発しその将来を準備するの一つの手段である。しかしこれまで日本に報告されたエコミュゼの研究は、村おこしを目的とした一面が強調され、ほとんど博物館として議論されていない⁽⁴⁾。

本稿は、以下の3つのことについて明らかにする。①エコミュゼの概念を紹介し、エコミュゼが古典的な博物館の延長線上に位置する発展した博物館であること、②フランスのプレス・ブルギニョン・エコミュゼ (Ecomusée de la Bresse Bourguignonne) (図1)を紹介し、博物館運営において行政がどのような支援を行い、また住民がどのような役割を担っているか、③プレス・ブルギニョン・エコミュゼの課題である。そして、これにより日本のエコミュージアムのあり方への手がかりを得ることを目的とする。なお報告

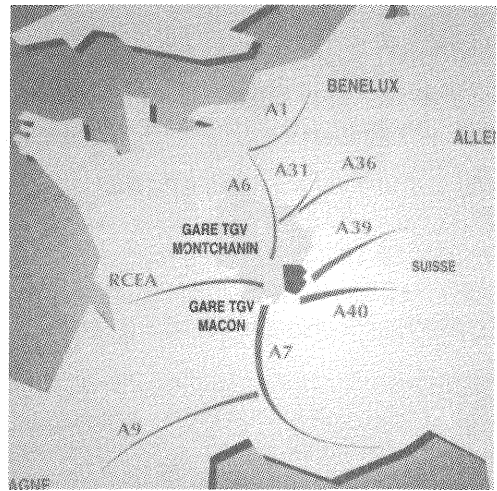


図1 プレス・ブルギニョン・エコミュゼ

のデータは、エコミュゼ海外セミナー (1996.6.18.~6.21.)参加時に得たものである。

2. エコミュゼの概念

エコミュゼとは、écologie (生態学) と musée (博物館) からなる造語である。エコミュゼという言葉の由来は、ギリシャの言葉「オイコス (Oikos)」からきている。「オイコス」は「家」を意味する。また家というのは、何人かの人がそこで一緒に暮らす。つまり「オイコス」は、「家族・家庭」も意味する。エコ

* 横浜国立大学大学院工学研究科

ミュゼは、人が住む環境界 (milieu) (5)と人がそれを保持している諸関係を自らのプログラムに組み入れた博物館である。

エコミュゼの創始者であるジョルジュ・アンリ・リヴィエール (Georges Henri Rivière) は、1980年にエコミュゼを「発展的定義」(資料1)として条文化した。

他に指標としては、1981年にフランス文化省がエコミュゼを博物館として認定する「エコミュゼの組織原則」(資料2)があげられる。「エコミュゼの組織原則」は、文化省が認めるエコミュゼの一つの目安である。私は、「エコミュゼの組織原則」が古典的な博物館の概念も含みつつ発展しているエコミュゼを確認するうえで有効であると考え。特に「エコミュゼの組織原則」は、理念的であった「発展的定義」を明文化した。このことは、エコミュゼをさらに博物館として具体化する効果があったと考える(6)。

では古典的な博物館の概念や機能を基にし、何を発展させ拡張してきたのであろうか。これについて私は、以下の5つをあげたい。

① 博物館活動の領域の拡張である。エコミュゼの博物館活動の領域は、テリトリー (territoire)と呼ばれている。テリトリーは、村や町などの行政の範囲であったり、その土地の地誌や自然環境などから決められている。テリトリーは、エコミュゼごとに明確に定められており、各エコミュゼの特徴を表わすことにおいて大切な概念である。

② 運営者の拡大である。エコミュゼの特性の一つは、エコミュゼにかかわる3つの委員会 (学術委員会・利用者委員会・経営委員会) に属する全ての会員に効果的な参加を保証することである。特に利用者委員会に参加する住民 (association, 以下アソシアシオンと記す)(7)が、博物館の運営に直接携わることである。また利用者委員会の代表者となった住民は、エコミュゼの運営会議で発言権を持っている。こうした運営者の拡大は、エコ

ミュゼが住民のなかの博物館であることを表している。

③ コレクション対象の拡大である。エコミュゼのコレクションは、自然遺産 (山岳, 河川, 森林, 動物, 植物 etc.), 文化遺産 (町並み, 古城, 考古遺跡, 史跡, 風俗, 慣習 etc.), 産業遺産 (農業, 果樹園, 林業, 生産工場, 鉱山 etc.) のような無形財・動植物財に及ぶ広いものである。

④ 地域研究者らによる学際的な広がりや相互の理解と還元である。エコミュゼの学術委員会は、特有の学際性を反映して、農学, 考古学, 生物学, 生態学, 経済学, 民族学, 地理学, 歴史学, 美術史学, 社会学などのような基本的な学問分野と、エコミュゼの活動に有益な応用的な学問分野の専門家から構成されている。その結果コレクションは、テリトリー内の郷土誌を中心として総合化され、展示されている(8)。

⑤ 保存・展示の概念の変化である。エコミュゼは、遺産の「時間」の流れや「場所」

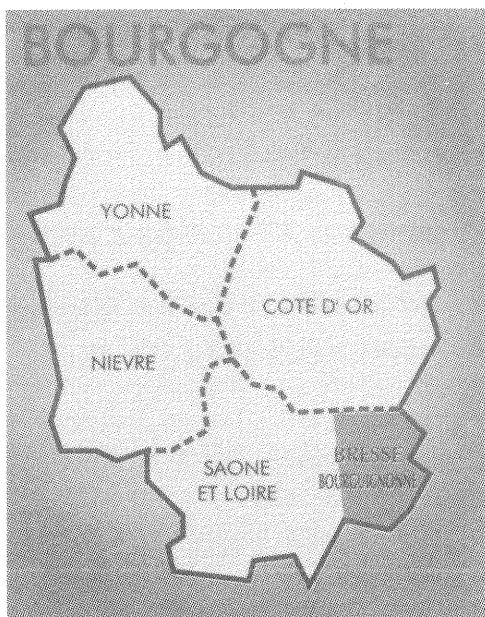


図2 ブルゴーニュ地方の中のブレス地域

の所在をできるだけ本来あるがままの姿で保存・展示するように試みている。

以上、エコミュゼは、古典的な博物館の延長上に位置づけられることを明らかにした。

つぎに事例としてプレス・ブルギニオン・エコミュゼを紹介し、博物館運営の特性を知るためにその目的やテリトリーについて明らかにする。

3. プレス・ブルギニオン・エコミュゼの概要

プレス・ブルギニオンという呼び名は、「ブルゴーニュ地方の中にあるプレス地域 (Bresse Bourguignonne)」という意味で、エコミュゼによって名付けられた。(図2) プレス・ブルギニオン・エコミュゼは、「プレス・ブルギニオン」という呼び名が日常言語へ定着することに努めている。その目的は、プレス地域の住民にアイデンティティを持たせ、生まれてくる子どもたちがその住民であることに誇りを持ち得るよう支援することである。またプレス地域を開発し、若鶏以外の産物もよく知ってもらうことである。

このエコミュゼは、1980年に予備調査が始まり、1981年10月に準備委員会が設立された。そして常任の作業班が設置され、遺産の目録作成に着手した。その後1984～1988年にテーマ別アンテナ (antennes thématiques) (9)の開設が行われた (図3)。

プレス・ブルギニオン・エコミュゼの特性を示すには、まずテリトリーを規定することである。プレス・ブルギニオンは、ブルゴーニュ地方の最も東よりの地域に広がっている。面積は、1690 km²、115の市町村 (communes, 以下コミュンと記す)にまたがり、そこには約7万人が生活している。このエコミュゼのテリトリーを決めるのに一番大切なことは土質である。この辺りの土地は粘土質で、今から800年前水で覆われていた。土質は、その地域の産業や慣習・農耕方法を規定する。例えばこのプレス地域は、世界最良の

プレスチキンが有名である。この地域で飼育された若鶏は、プレスチキンという生産地名が付く。プレスチキンの特徴は、ミネラルの少ない粘土質の土地に育つため骨が細いことである。農業の方法では、この土地が粘土質のため山盛りに土をおこしてその上に種を蒔き、周りの低い所は水はけ用にするこも、この土質の影響である。

したがってプレス・ブルギニオン・エコミュゼの場合、土質によって決められたテリトリーは、この地域の特質を明確に位置づけることで理にかなっていると考えられる。

4.0 プレス・ブルギニオン・エコミュゼの機構

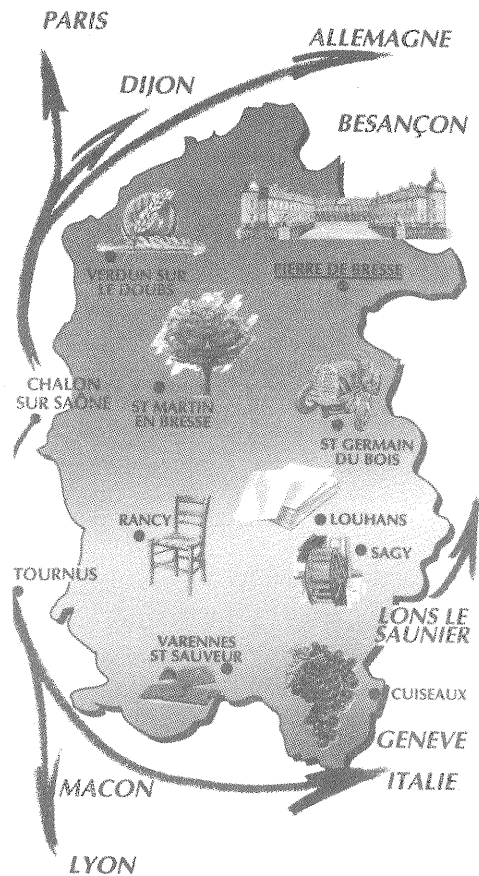


図3 コア博物館とテーマ別アンテナ

つぎにプレス・ブルギニョン・エコミュゼの仕組みが、遺産の保護と活用を図るうえで効果的であることを明らかにする。このエコミュゼは、1つのコア博物館 (lieu central) と保存・展示の機能をもつ6つのテーマ別アンテナがテリトリー内に分散した博物館である(図4-A)。他のエコミュゼには、全てのテーマ博物館が対等にネットワークされた博物館群もある(図4-B)⁽¹⁰⁾。プレス・ブルギニョン・エコミュゼは、アンテナの質を高めるばかりでなく、他の機関(図書館や音楽学校など)と連携を行っている。したがって、テリトリー内を点から線へ、さらに面として広がりをもつことで、重層化された文化を主張することができる。

コア博物館の機能は、エコミュゼ全体のインフォメーションセンターや研究センターとして、調査研究・資料収集や保存を実施することである。

アンテナの機能は、地域で培われてきた遺産を現地で保存・展示することである。各地域にアンテナを置くことは、博物館の利用圏が住民の生活圏内に及び、住民が行き易い場所になる。そしてアソシアシオンのスタッフは、ここを身近な資産として日常的に活用しながら保存している。

現在このエコミュゼは、約350名の会員がいる。プレスの住民は、この地域のアイデンティティを守る傾向が強いので、アンテナを

つくる際に良い要因となっている⁽¹¹⁾。しかし、フランス国内の新興都市にエコミュゼをつくった場合は、あまりうまくいっていないのが実状である。なぜなら農村と比べ新興都市の住民は、まとまったアイデンティティや目的意識が持ちにくいからと推測する。

プレス・ブルギニョン・エコミュゼの年間事業費は約300万FFであり、その内自己資金率は45%に達している。その内訳は、入場料(15FF均一)や外部機関に資料を貸し出す使用料、ミュージアムショップの売り上げなどである。残りは行政から補助をうけている。補助の割合は国(文化・農業・観光・環境・文部の各省庁)、ブルゴーニュ(Bourgogne)地方議会、サオヌ・エ・ロワール(Saone et Loire)県議会とコミューンから1/3ずつである。各アンテナで働く非常勤受付(7~10月)は合計10人いるが、その給料はアンテナの所属するコミューンが支払う。

以下、博物館運営における行政の支援と住民の役割について事例をあげながら具体的に報告を行う。

4.1 ピエール・ド・プレス城

ピエール・ド・プレス(Pierre-de-Bresse)は、プレス・ブルギニョンの北東部に位置し、約2000人の住民が住む郡の中心のコミューンである。

ピエール・ド・プレス城は、サオヌ・エ・

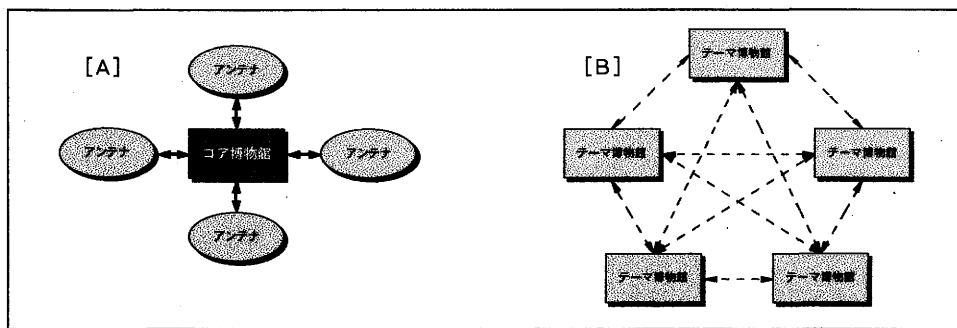


図4 エコミュゼの機構模式図

ロワール県議会の所有である。プレス・ブルギニョン・エコミュゼでは、土地や建物をもっていないが、他のエコミュゼでは所有する場合もある。

ここは、このエコミュゼのコア博物館にあたり、館長を兼任するコンセルヴァトゥール (Conservateur)⁽¹²⁾が1人常勤する。他に書記が1人、事務員が1人、学芸技術者が1人、資料収集員が1人、受付が1人、印刷係が1人、研究員が2人いる。

ここには、各アンテナにある主要な資料が常設展示されている(図5)。その他に特別展示室、事務室、研究室、多目的ホール、資料倉庫、簡易宿泊施設、ミュージアムショップ、喫茶店などが設けられている。

4.2 葡萄栽培とワインづくりのアンテナ

このアンテナは、1986年に設立された(図6)。その目的は、クイゾー(Cuiseaux)に葡萄とワインの産業の史跡を保存することである。ここには、クイゾーの歴史を調べる郷土史研究会がある。プレス・ブルギニョン・エコミュゼは、郷土史研究会や観光協会にアンテナの資料研究の話をもちかけた。このエコミュゼの政策は、その地域にあるアソシアシオンの活動を支援することである。

地下室はワインの貯蔵庫になっている。1階は白ワイン用の葡萄が栽培され、その奥に蒸留機が展示してある。2階は農家の住居を

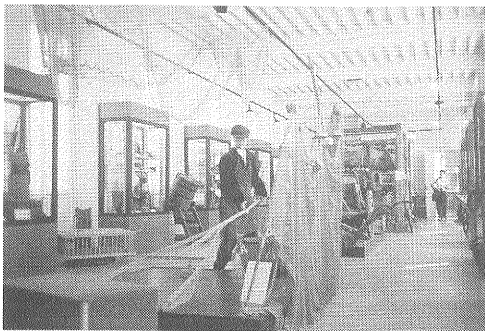


図5 ピエール・ド・プレス城の常設展示室

再現している。3階は葡萄栽培の工程や樽の作り方について展示してある。

週日、非常勤受付が1人おり、週末には、アソシアシオンの人が受付を行う。事前に連絡をすれば展示解説をしてくれる。

屋根裏部屋の展示費用は、約16万FFで、国から40~50%の援助がでており、あとはこのエコミュゼが出している。また建物の改修工事費は約20万FFかかり、国が約40%、県(département)が約40%、コミューンから約20%を負担した。

通常アンテナを設立する場合、建物の方は町が担当して、展示はエコミュゼが担当する場合が多い。

4.3 椅子職人とわら職人のアンテナ

このアンテナは1985年に設立された。その目的は、地元の各社が協同のもとで地場産業のわら細工と木工による伝統的な椅子づくりを保存・展示することにある。

ランシー(Rancy)は、19世紀初頭から椅子づくりが始まり、現在も地場産業として盛んなコミューンである。その仕事内容は、男性が工場で木の加工をし、女性が自宅でわら細工の仕事をするのである。

展示は、ランシーにおける椅子づくりの歴史、椅子づくりの工程、デザイン、工具である。アソシアシオンの女性が展示解説や、わら細工の演示をしている。



図6 葡萄栽培とワインづくりのアンテナ

4.4 ブレス農業のアンテナ

サンジェルマン・ドゥ・ボイス (Saint-Germain-du-Bois) は、ブレス・ブルギニョン・エコミュゼのテリトリー内の中央に位置するコミューンである。コミューンは、この土地を買い取りアンテナを開館した。ここは、住民を対象としたアンテナ施設を先ずつくり、そこに人々を集めるというやり方であった。

このコミューンでは、20世紀初頭の農業従事者の人口が労働者の90%を占めていた。かつてこの建物は、農業に関係した麦の倉庫であった。したがって農業関連の展示をするには都合のよい場所である。

1階は、農機具や典型的な農家の模型などが展示してある。またその奥でブレスチキンの特別展示を行っている。2階は、馬具の鍛造工場の再現、伝統的農具や馬具が展示されている。

アンテナの運営は、14人の教員やその退職者が中心となっている(図7)。その活動内容は、週末における受付や展示解説などである。住民がこの活動に参加する理由は、コミューンに対する愛情であり、ここの遺産を外の人に知らせたい、そして子どもたちに当時の暮らしの様子を伝えたいとのことである。また中学校の地理の授業や鳥禽類の授業をやる時は、ここの資料を教材として活用している。



図7 「ブレス農業のアンテナ」のスタッフ

4.5 木と森のアンテナ

この建物は、以前小学校として使用されていた校舎をコミューンが購入し、1983年にアンテナを設立した(図8)。

1階は、ブレスの森林分布、種別の解説と木材、木靴工場の再現などを展示している。

2階は、木材の加工用工具が展示している。

ここにスタッフは約50人いる。ここのスタッフの特徴は、木の仕事の関係者や手工業をやっていた人が中心で、木や森について大変よく知っている。

今日、アソシアションは、コミューンと協調して活動範囲を広げ、コミューンの広場でも展示ができるようになってきている。例えば1つの広場では、千年経った木が近くの川底から見つかり、それを取り出し、トーチムポールのように立てて展示している。また国・コミューン・エコミュゼの三者は、会談して町有林の中に散歩道をつくっている。

4.6 新聞づくりのアンテナ

ここは、地方新聞インディペンデント (L'INDEPENDANT) 紙の印刷所であったが、1986年にコミューンが買い取りアンテナとした。

編集長室は、1930年代を基準に再現し、通り沿いの窓から覗き込むことができる。資料室は、L'INDEPENDANT 紙の創刊号(1880年)から現在まで保存されている。これらの

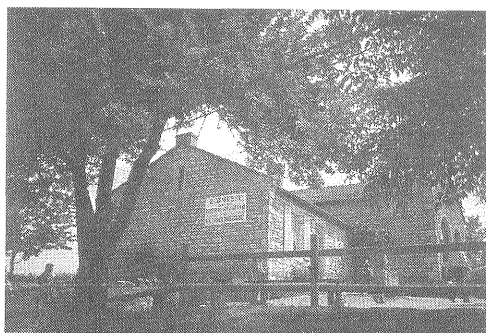


図8 校舎に使われていた「木と森のアンテナ」

資料は、ルアン(Louhans)の歴史を知るうえで貴重な情報源になっている。印刷室は、1869年製の印刷機から今世紀前半の印刷機まで、実際に可動する状態で保存・展示されている(図9)。ここでは、子どもたちが来て実際に新聞を作り、印刷を体験できる。そして、子どもにとって印字や絵が直接手で触れることが出来るようにしてある。

4.7 小麦とパンの博物館

このコミューン(Verdun sur le Doubs)には、自然の地形を生かした城塞がある。そして、以前この建物は城塞の守衛所であった。この地域はフランス国内で3番目の小麦の穀倉地帯で、1930年にフランスではじめて小麦のサイロができた所である。

この博物館は、1974年、麦について関心のある世界的な文学者の意志によって設立された。ここは、プレス・ブルギニョン・エコミュゼが設立される前から博物館として機能していた。したがって「小麦とパンの博物館」は、厳密にいうとアンテナとしての機能ではなく、エコミュゼと同格の博物館として活動を行っている。またドイツやスイスにあるパンの博物館と交流している。

開館期間は5～9月の間で、来館者数は年間約2500人である。1階は麦栽培の歴史、麦の品種、農機具などが展示してある。2階はパンの起源、パンのバリエーションが展示し

てある(図10)。

5. プレス・ブルギニョン・エコミュゼの課題

私は、今後プレス・ブルギニョン・エコミュゼが長く持続していくために、3つのことが必要であると考えます。

① これらの遺産を次世代に伝えていくためには、アンテナを運営するアソシアシオンのスタッフを多く育てる必要がある。そのためには、教育・指導員を確保し、文化講座において地域の住民を養成していく。

② 子どもたちに、このエコミュゼでの経験を通じて自分たちが住んでいる地域を愛してもらうことが必要である。それには、子どもの教育を担っている学校へ頻繁に赴き、先生との協力で児童向けの巡回展示を企画する。

③ このエコミュゼのテリトリーは広範囲であるため、自動車での移動が不可欠である。しかし、道路標識による各アンテナへの誘導は、未だ未整備である。したがって、コアやアンテナ相互を結ぶ交通手段の整備が必要である。例えば、観光局と協力して、コア博物館を拠点とした各アンテナへのバスツアーを設ける。

6. 日本のエコミュージアムにおける課題

まず日本のエコミュージアムの現状についてふれておく。日本の農山村は、過疎化が地

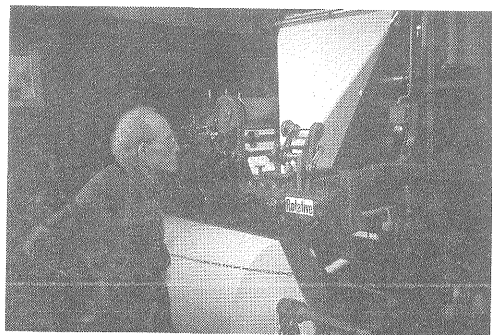


図9 新聞づくりの実演



図10 パンの展示室

域の問題となっている。住民は、その対策として観光業を促進し、地域を活性化させ、村の雇用の創出に努めている。日本のエコミュージアムは、その住民運動とエコミュゼの住民参加による手法が結びつき展開している。

日本でエコミュージアムを博物館活動として展開するには、以下の6つのことが課題としてあげられる。

① 日本は、自治体と住民が共同出資して博物館を運営することができない。つまりボランティア発想で自由に活動できる民間非営利組織が公的に認められていない。したがって自発的な団体は、税制上の支援措置が受けられず、手作りの小規模な博物館を運営することができない。

② 博物館の教育活動に継続性を持たせるためには、住民が積極的に参加することが必要である。日本のエコミュージアムは、村おこし運動などが中心である。住民が村おこしに参加することは、運動として継続性がある。しかし、村おこしは観光業の促進も意味する。日本のエコミュージアムは、エコミュゼと比べ商業化に偏る懸念がある。

③ それを防ぐためには、エコミュゼのコンセルヴァトゥールに代わる博物館専門職員の存在が必要である。村おこしが博物館活動になるには、主体となる住民とそれを支える博物館専門職員の存在が不可欠である。エコミュゼのコンセルヴァトゥールの資質は、博物館学、経済学、民族学、考古学、芸術学などに通じる学際的資質の他に、館長の立場として行政の能力も要求される。エコミュージアムの博物館専門職員の資質は、住民に信頼されることも必要である。リヴィエールは、「エコミュゼはある住民が専門家と共につくっていくものである。しかし専門家の介入はできるだけ遅い時期にしてほしい」⁽¹³⁾と述べている。

④ 博物館に対する行政支援のあり方が問

題である。近頃、日本の博物館の運営は、行政と民間企業が合同出資した企業体（第三セクター）が行うケースが多くなってきた。しかし博物館活動を行ううえで行政色が強くなり、他の行政や企業からの資金援助を妨げている。つまりそれは、行政の管理下にあるので、長い目で見て博物館活動が沈滞化してしまう恐れがある。

⑤ 住民、博物館専門職員、行政・企業体は、別々に活動していることが問題としてあげられる。各々が対等なパートナーシップを組まなければ、博物館活動のバランスが不均衡に陥る懸念がある。

⑥ 日本のエコミュージアムにおいて「エコミュージアムの組織原則」を制定する必要がある。ドミニク・リヴィエール氏 (Dominique Rivière : プレス・ブルギニオン・エコミュゼ館長) は、日本においても早急に「エコミュージアムの組織原則」を設けるとを熱望した。しかし、どの機関がそれを制定し、認定するかが課題としてあげられる。

7. おわりに

最後に遺産の保護・活用における住民・博物館・行政の役割について付記しておく。

私は、「地域の何をどう保護すべきかは、地域の住民が自ら探求し、決定すべきである」と考える。そして地域の住民にとって大切なことは、地域の遺産をより身近な資産として活用することである。こうした住民主体の民間レベルによる活用の促進は、多様な保護手法のなかで、多くの遺産を後世に幅広く継承していくことを可能にする。

そして、新たな博物館に求められることは、地域の住民が遺産に親しめる機会を拡充するため、情報システムの整備やボランティア活動の奨励・支援に努めることである。

今後、遺産を保存するための修復工事は、新たな市場になると推測される。その市場の拡大が、多くの伝統的な材料が生産されるこ

とにつながる。その結果、伝統的な材料を使用する技法も伝承される。したがって行政の支援は、遺産の維持管理や修復を行うことに不可欠な職人に対しても、助成や育成を行うことが求められる。

謝辞

本稿をすすめるに当たり矢島國雄教授（明治大学文学部）と大原一興助教授（横浜国立大学工学部）に助言を戴きました。またエコミュゼ海外セミナーの参加者から寄せられた報告書をもとにデータの再確認をさせて戴きました。ここに記して感謝の意を表します。

注

- (1) 私が定義する「博物館」とは、博物館活動を行う機関である。博物館活動とは、コレクションの収集・保存、研究、展示、教育活動を示す機能である。したがって博物館は、バランスよく均衡のとれた博物館活動を行うことが必要である。
- (2) 倉田公裕氏は、博物館をめぐる地域問題の研究する学問を「博物館社会学」と捉え、つぎのように述べている。「博物館は一つの機能集団であり、組織 (Organization) である。だから、それは社会的文化的機能をもつものであり、博物館が社会内において営む機能と、社会における地位、そして社会に果たす役割とを究明することは誠に重要なことであり、博物館社会学はこれらについての科学的解明をその任務としているといえよう。」□文献 (1) pp.172.
- (3) 本稿において“エコミュゼ (écomusé)”は、1970 年以後 Georges Henri Rivière の運動からなるフランス国内の博物館を指すことにする。1996 年現在、「エコミュゼと社会博物館の連盟 (Fédération des écomusées et des musées de société)」に加盟している館は 70 である。その内、フランスのエコミュゼは 33 館である。他は、フランスの社会博物館が 33 館、ベルギーのエ

コミュゼが 3 館、ベルギーの社会博物館が 1 館である。□文献 (11)。

つぎに“エコミュージアム (ecomuseum)”は、エコミュゼの思想が世界に伝播し、設立された、フランス国外の機関とする。その理由としては、エコミュゼは、言語の違いによる弊害や公的制度などの国情の違いに応じて変化するからである。

- (4) なぜ本稿でエコミュゼを博物館として問うかという点、エコミュゼは博物館における諸機能を手段として地域社会の課題に取り組んだことに功績があるからである。
- (5) 「環境界 (milieu)」という概念は、「自然」環境と同時に「社会」環境を喚起する。
- (6) その効果とは、<エコミュゼの機能>では、まず学術委員会において博物館の研究性を示している。つぎに利用者委員会において教育活動による住民参加のあり方を示している。さらに、経営委員会の権利において税制上の支援措置がとられていることから、エコミュゼを公的な文化機関として認められている。<エコミュゼの館長>では、館長の選定に一つの基準を設けることで、博物館としての専門性を保証した。
- (7) エコミュゼは、フランスにおける 1901 年のアソシアシオンに関する法律 (loi du 1^{er} juillet 1901 relative au contrat d'association) に則った民間非営利組織である。その法律は、いかなる人々やグループであっても非営利で自主的な協団体 (アソシアシオン) を創ることを法的に承認し、その公的有用性を認め、かつその活動を保証している。したがってアソシアシオンを設立することで、民間運営の博物館を開館することができる。
- (8) 倉田氏は、「総合 (Synthesis) とは、分析され、分解されたものを再び全体に結合する手続きである。」と述べている。また地域博物館の使命で「(1) 地域学術の振興 (国立のレベルで扱わない、また中央では解ら

ない地域の特殊問題) (2)郷土の自然、文化及び、文化財の保存、振興、育成を図り、いわゆる郷土誌 (Heimat Kund) の中心となるべきであろう。」と記している。□文献 (1) pp.225, 227.

- (9) アンテナは、地域の特色を持つ資料を保存・展示している機関である。日本ではサテライトとも呼ばれている。それらは、主に地域のアソシアシオンのスタッフに管理・運営されている。プレス・ブルギニョン・エコミュゼには、5つのアンテナがある(木と森のアンテナ、プレス農業のアンテナ、椅子職人とわら職人のアンテナ、葡萄栽培とワインづくりのアンテナ、新聞づくりのアンテナ)。

アンテナとは別に瓦工場跡、鍛造所跡、17世紀に建てられた歴史的建造物などがある。これらは、それを管理・運営するアソシアシオンがないのでアンテナとして認められていない。

- (10) クルゾー・モンソー・レ・ミーヌ・エコミュゼ (Ecomusée du Creusot・Montceau les Mines)などは、全ての博物館を同格に位置づけている。
- (11) その他サン・カンタン・アン・イヴリーヌ・エコミュゼ (Ecomusée de Saint-Quentin-en-Yvelines)の場合、アソシアシオンの対象者はフランス国鉄の退職者に絞ったので、まとまった目的意識が持ちやすく、新たな展開が行われている。
- (12) コンセルヴァトゥールとは、フランスにおける国家資格の博物館専門職である。わが国の学芸員資格とは全く異なり、その地位は学芸員を統括する学芸部長以上に相当するといえる。
- (13) “エコミュゼ国際シンポジウム”津山市、1996.9.21.、Pierre Mayrand「エコミュゼとはまるでわかってもらえない新博物館学

だろうか」の基調講演において述べられた。

参考・引用文献

- (1) 倉田公裕、『博物館学』、東京堂出版 1979。
- (2) Georges Henri Rivière, 『LA MUSEOLOGIE』, Dunod 1989。
- (3) 今井信吾,「エコミュゼをめぐるいくつかのこと①~⑥」,『環境文化研究所報』 vol.27~33 1992~1994。
- (4) 丹青研究所,『ECOMUSEUM-エコミュージアムの理念と海外事例報告-』 1993。
- (5) 岩橋恵子,「フランスにおけるエコミュージアムの現状と課題-フランス成人教育研究の視点から-」,『九州教育学会研究紀要』第22巻, 1994。
- (6) 吉兼秀夫,「エコミュージアムの概念と実態」,『環境文化研究所紀要』No. 4 1994.3。
- (7) Dominique Riviere 著/後藤尚人訳,「あるフランス型エコミュゼ-ブルゴーニュ・プレス・エコミュゼ-」,生態環境博物館学 (Écomuséologie) シンポジウム, 朝日町 1995.7.2。
- (8) 前田千世,「エコミュゼに関する一考察-その背景と理念形成から-」,『平成7年度修士論文お茶の水女子大学大学院人文科学研究科』 1996。
- (9) 大原一興,「エコミュージアムの潮流と現代日本における可能性」,『地域開発1996年』3月号,日本地域開発センター 1996.3。
- (10) 岩橋恵子,「フランスにおけるエコミュージアム運動の歴史的展開とその特質」,『鹿児島女子大学「研究紀要」』第17巻第2号, 1996.3。
- (11) 「エコミュゼ国際シンポジウム」 1996

【資料1】 エコミュゼの発展的定義

1980年1月22日 Georges Henri Rivière

『エコミュゼは、行政当局と住民が共に構想し、作り上げ、活用する手段である。行政当局は、専門家と共に、便宜をはかり財源を提供する。住民は、各自の興味にしたがって、自分たちの知識や取り組み能力を提供する。

それはこうした住民が自らを認識するために見つめ合う鏡。そこで住民は、自分たちが繋ぎ止められている地域の説明を、また、世代の連続性や非連続性を通して、前世代の住民の説明に結びつく説明をしようとする。それはこうした住民が、自分たちをよりよく知ってもらうために、自らの仕事やふるまい、内面性に誇りを持って来訪者に差し出す鏡である。

それは人と自然との表現。そこで人は自然的環境界のうちに解釈される。そして自然は、伝統的社会と産業社会が自分たちの持つイメージに自然を適合させたように、その原初状態において解釈される。

それは時間の表現。説明は人が出現した時代の手前にまで遡り、人が生きた先史時代・歴史的時代を通して広がり、人が生きている現代に至る。きたるべき時代に開かれ、それでいてエコミュゼは決定機関気取りをすることなく、現行のように情報伝達や批評的分析の役割を担う。

それは空間の解釈。そこは、歩みを止めたり、散策したくなるような特権的空間である。

それは研究所。エコミュゼが外部の研究機関とも協力して、住民とその環境界の歴史的・同世代的研究に貢献し、この分野における専門家の養成を奨励する限りにおいて。

それは保存機関。エコミュゼがその住民の自然遺産・文化遺産の保存と活用を援助する限りにおいて。

それは学校。エコミュゼがその住民を研究・保存活動に参加させたり、住民に自らの未来の諸問題をよりよく把握するように促せる限りにおいて。

この研究所、この保存機関、この学校は、共通の原理から着想されている。それらの機関が引き合いに出す文化というものは、そのもっとも広い意味において理解されるべきで、それらの機関は、いかなる住民の層から発せられた表明であれ、芸術的表現や文化の尊厳を知らしめるように努めねばならない。多様性には限界がないが、それほどまでに資料はある標本から他の標本にかけて異なっている。それらの機関は自らのうちに閉じこめることなく、受け入れかつ与えていかねばならない。』

以上、後藤尚人訳「あるフランス型エコミュゼ：ブルゴーニュ・プレス・エコミュゼ」生態環境博物館学シンポジウム、pp.3~4、朝日町、1995.7.2.より引用。

【資料2】 エコミュゼの〈組織原則〉
1981年3月4日 文化省

定義

第1条：エコミュゼは、ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた環境と生活様式を表す自然・文化財産を総体にして、恒久的な方法で、研究・保存・展示・活用する機能を保障する文化機関である。

目的

第2条：第1条に示された機能は、特に次の活動を実行することで実現される。

a) エコミュゼの動産・不動産遺産の目録を作成すること。

b) その地域に関する物的資料と史料を収集して保存し、展示すること。

c) 特別展、アニメーション(学習援助)、他の催しを企画すること。

d) 購入、寄贈、遺贈によりコレクションを豊かにし、募金を行い、フランス博物館局の助言のもとに、遺産の一部の保全者と契約を結ぶこと。

e) 「総目録」作成事業の地域担当機関と連携して、エコミュゼのなかにある地方遺産を明確に表している動産・不動産を研究すること。

f) 取得の見込みのない自然な環境の下にある動産・不動産に必要な保護の方法を、所轄機関に提案すること。

g) エコミュゼの枠内において、できれば地域レベルの教育・研究機関の助力を得て、住民の実践、知識、社会組織について調査研究計画を定め、実行すること。

h) 教育・研究機関と協力して、専門家(コンセルヴァトゥール、教育担当者、研究者、技術者)を育成すること。

i) 研究データを保存し、報告すること。

j) 学校、大学の助力を得て、エコミュゼ

への関心を喚起し、深める活動を計画し、実行すること。

k) エコミュゼのある地域についての教育的な展示をすること。

エコミュゼの母体

第3条：エコミュゼの仕事の管理は、地方自治体、公的機関、合同組織、アソシアシオン、財団によって確実に行われる。

コレクションの規定

第4条：エコミュゼの自然・文化遺産は、動的・不動的財、動植物財、無形財からなる。それらは、譲渡できず、かつ、その権利は取り消しできない。動植物財については、その特徴は、典型となる種族に結び付いている。産業世界の証拠となる動的財については、それが標本として代表する一連の系列に結び付いている。

エコミュゼが購入、寄贈や遺贈により取得したものの受け入れは、国立博物館連合の芸術的価値についての助言を受け、文化省の意見を聞かなければならない。

エコミュゼの閉館、または所有者組織の解散は、フランス博物館局の意見を受けて、その財産は、類似した目的・規定を持ち、同じ地域内にある組織に分与される。

エコミュゼの機能

第5条：エコミュゼの機能は、責任を持つ設置機関の運営を定めている規則によって決定される。ただし、エコミュゼの特性は、3つの委員会の設置によって表され、計画の学術性を保証し、エコミュゼにかかわる人すべてに効果的な参加を保証する。

エコミュゼの法的性格、その重要性からすると、3つの委員会のシステムは、ある程度形式化したものにならざるを得ない。

第6条：前条の3つの委員会は、以下のとおりである。

a) 学術委員会 エコミュゼ特有の学際性を反映して、学術委員会は、農学、考古学、生物学、生態学、経済学、民族学、地理学、歴史学、美術史学、社会学などのような、基本的な学問分野とエコミュゼの活動に有益な応用的な学問分野の専門家から構成される。委員会は、エコミュゼの学術計画を練り、決定された活動を実施することにおいて館長を助け、利用者委員会からの提案の学術的厳格さを絶えず検討する。

b) 利用者委員会 エコミュゼへの住民参加の表現として、利用者委員会は、アソシアシオンの代表と、エコミュゼを定期的に利用し、その活動に協力する他の組織の代表から構成される。委員会は、活動計画を提案し、その結果の評価を行う。

c) 経営委員会 経営委員会は、エコミュゼに資金援助する組織（各省庁の部局、各地方自治体、民間、他の公的組織）と、契約後も自由に使える形での財産の譲渡の契約をエコミュゼと交わした組織の代表者から構成される。館長の報告をうけて、委員会はエコミュゼの予算を審議し、運営や管理を監査する。第7条：アソシアシオンの規定に基づき、運営会議は、上記の3つの委員会の代表者から構成される。

エコミュゼの館長

第8条：館長は、エコミュゼを掌理し、その遺産の研究、保存、活用に常に気を配り、予算の準備、執行を行う。館長は、3つの委員会に出席し、発言権を持つ。館長は、1945年8月31日の政令で定められた条件のもとで、統制博物館のコンセルバトゥール職有資格者のリストから、採用される。館長は、エコミュゼの所有者組織の規定によって定められた手続きに従って、その組織によって選ばれる。館長は、同条件に従って採用された補助研究員に補佐される。他の人事もエコミュゼの所轄であり、その権限下にある。その規定は、

被用者組織の共通の権利に従う。

文化省の関与

第9条：文化省のフランス博物館局と遺産局は協力して関与し、または地域圏文化問題局が関与する。それは特に以下のような形をとる。

フランス博物館局は、エコミュゼの財産の保存や展示を学術的に監督し、次のような博物館学的活動の実現のために学術的、財政的援助をする：特別展、アニメーション、修復、購入、カタログ作成。フランス博物館局は同様に、エコミュゼが着手した建物の外装や内装の整備の作業（改装、現存する建物の再整備、拡張、建設）に対して投資貸付を認めることができる。他方で、フランス博物館局は、エコミュゼの日常の活動（特に人件費）への援助は認めることができない。フランス博物館局は、1945年8月31日の政令で定められた条件のもとで、エコミュゼにおいて、学術研究スタッフの採用を行う。

遺産局は、フランス博物館局と連携している民族遺産会議の提案に基づいて、住民の実践、知識、社会組織、将来について、エコミュゼの地域で試みられる研究とエコミュゼへの関心を喚起するために活動計画に、学術的、財政的援助をする。

遺産局は、自然な環境の下での保護と保存の方法を指示する。

この2つの局の活動と平行して、特別な活動については、文化発展委員会が行政、財政計画に参加できる。

エコミュゼのための国家の援助は、参加できる各省庁間の手続きの枠内において、他の省庁の部門（通産省、環境省、大学、農業省、教育省、国土整備開発局、文化介入基金など）でも同様に、活用されるであろう。

以上、前田千世訳「エコミュゼに関する一考察」『平成7年度修士論文お茶の水女子大学大学院人文科学研究科』pp.90~94,より引用。

The Citizens Participation in Museum Management and the Administrative Supports —In Case of the Bresse Bourguignonne Ecomusée—

ISHIKAWA Hiroyuki

This paper reports the management of Bresse Bourguignonne Ecomusée by the regional residents and the administrative supports.

First, I will define a museum. Museum is an organization which has many activities. The activities of a museum include collecting materials, preserving, researching, exhibiting collections and promoting education. Thus, a museum needs to take a well balanced role. There are various types of museums-preservation, research, educational activity and mass-participation. The Ecomusée is a participatory type. The Ecomusée is a museum which has been developed in a traditional style. The general rule of a Ecomusée is that the citizens take part in museums management, thus they have a voice at the conference. The role of a Ecomusée is to foster responsibility and establish the people's identity through its activities. As a result, the Ecomusée has become museum of citizens.

The Bresse Bourguignonne Ecomusée is about 300 km southeast of Paris. The Ecomusée is a network of museums. The Ecomusée has 7 museums : The County Chateau, The House of Corn and Bread, The House of Wood and the Forest, Agriculture in Bresse, Chair-makers and Strawworkers, The Vine-grower and His Vines and Newspaper Workshop. The Ecomusée is a nonprofit organization in France. There are about 350 members the Ecomusée consists of three commissions: The Academic Commission, The User Commission and The Management Commission. Each commission has the opportunity to exchange information.

I think that the following three steps are necessary in order to ensure that the Ecomusée will last for a long time : First, to make sure that the collection is handed properly down to the next generation, a large body of volunteers will have to be available ; Second, it is important that many children be taught to love the land where they live ; Third, the Ecomusee need to links 'lieu central' and 'antennes thematiques' by bus. The territory of the Ecomusee is a large field, therefore visitors have to go by car.

In case of a Japanese ecomuseum, I think that the following six issues need to be discussed so that a ecomuseum can be developed in the future : First, it is not permitted us to have a small nonprofit organization in Japan ; Second, a Jananese ecomuseum tends to be thrown into a tourist industry ; Third, it is necessary to be new museum professions ; Fourth, the administration supports the museum management ; Fifth, the three powers are citizens, museum professions and the administration ; Sixth, it is necessary to establish the Japanese ecomuseum regulations.